早稲田大学大隈記念大講堂と旧早稲田大学出版部事務棟
との連関性に関する考察

佐藤功一の「建築一都市」観に関する研究 2

A CONSIDERATION ON THE RELATION
BETWEEN WASEDA UNIVERSITY OKUMA MEMORIAL HALL
AND THE OFFICE OF WASEDA UNIVERSITY PRESS

A study on Koichi Satoh's views of "architecture-city" Part 2

米山 勇*

Isamu YONEYAMA

This paper reveals the meaning of relation between Waseda University Okuma Memorial Hall and the office of Waseda University Press. The existence of the Waseda University Press, completed across the street from Okuma Auditorium in the same year, was very important. Efforts were made to achieve a continuity between the two buildings in terms of detail design and materials, but differences in style, height and so on were pursued willingly. Here, Satoh koichi was able to achieve the goal of creating a beautiful city viewed from the street while at the same time realizing a sort of eclectic "architecture-city" beauty by combining various styles.

Keywords : Koichi Satoh, Waseda University Okuma Memorial Hall, Waseda University Press, urban beauty, architecture-city, eclecticism

佐藤功一, 早稲田大学大隈記念大講堂, 早稲田大学出版部, 都市美観, 建築一都市, 折衷主義

0. はじめに

佐藤功一は明治11年(1878)7月2日栃木県小金井に生まれ、昭和16年(1941)6月12日東京都小石川の自邸に没した建築家である。

佐藤は生涯で233の作品を設計したとされる¹⁾。一方、彼が日本近代においていち早く「都市美観」の問題に着目し、その重要性を

図1 早稲田大学大隈記念大講堂(撮影筆者)

論じた人物であったことについてはすでに幾つかの文献等で述べられている²⁾。とくに池原義郎氏は、早稲田大学大隈記念大講堂(大隈講堂、以下同称)をはじめとする佐藤の作品と都市景観の関係について論じ、「柔らかい景観構成」という語句で佐藤の特質を指摘している。しかし、複数建築間における「都市美」への志向および実践という見地から捉えた研究はなく、佐藤功一の「建築一都市」観の考究は未だ不十分であると考え³⁾。

本研究は、建築家・佐藤功一の「建築一都市」観の特質を明らかにしようとするものであり、まず前稿⁴⁾で、佐藤壮年期の代表作である東京市政調査会館及東京市公会堂(日比谷公会堂、以下同称、昭和4)についていくつかの問題点を抽出し、それが意味するものについて論じた。本稿では、同時期の作品である大隈講堂(昭和2・1927)と旧早稲田大学出版部事務棟(同左)について論及し、佐藤功一の都市への視線の特質を明らかにする。

1. 大隈講堂の設計競技と実施案の特質

大隈講堂(図1)は、早稲田大学の創立45周年を記念して建設された。当初、建物の設計は日比谷公会堂と同じく懸賞設計競技によっており、結果は一等が前田健二郎・岡田捷五郎、二等が水谷武彦、

* 東京都江戸東京博物館都市歴史研究室 助教授・工修

Assoc. Prof., Urban History Research Center, Edo-Tokyo Museum, M. Eng.

図2 コンペ一等前田・岡田案外観パース⁵⁾ 図3 同上一階平面図⁶⁾ (図面下が北) 図4 実施案一階平面図⁷⁾ (同上) 図5 実施案北側立面図⁸⁾

三等が矢部金太郎であった。しかし、当選案は実施されず、懸賞委員の一人であった佐藤功一の指導の下に、佐藤武夫が実施図面を担当することとなった。なぜ懸賞設計の当選案が廃棄されたかについては、以下の佐藤功一の言説から読みとることができよう。

当選案はそれぞれ特色あるものであったが、大隈会館の庭の背景として適しない。これは最初参考図として示したあの図案の外壁は、観聴席の鐘形をなせる其の壁に沿って彎曲せるものであつて、内容たる其の機能を極度に表現せるものであった。当選図案の平面図は孰れも全くこれに基づいてあつたが為に、外観基動的に、壁は前面のみ徒らに高く後方に至るに従つて段形或は曲線をなして低く、屋根の形も亦これに従つて前方より後方に傾いたものであつた。為に会館のあの古典的な書院とこれに調和をもてる静かなる日本式庭園の背景としては決して適当せるものではなかつた。(中略) そのうちにあの大地震で総ては一時中止といふことになつたが、愈々大正十四年から着手することになつたのである⁹⁾。(以上、傍点は米山による)

大隈講堂のコンペにおいては当初、佐藤功一指導の下に今井兼次が作成した参考図が示されており、いずれの当選案もそれに基づいて設計された。外観は「一等案をはじめ、おおむねセセッションスタイルのものが多」¹⁰⁾く、西側の正面性を強調したシンメトリーなデザインをとっていた。一等当選案を図2, 3に示すが、屋根は前方から後方へと蛇腹状に大きく傾斜し、両側面の外壁も平面図の観客席形状に沿って湾曲しており、大隈庭園との調和という点において問題が指摘されたのだと思われる¹¹⁾。一方、実施案(図4)ではホール形状自体は当選案と同様鐘形であるが、外壁は東側を除いて矩形とされた。庭園に面する北側には半円アーチと交差ヴォールトによるロマネスク風の外廊が配されている(図5, 6)。大隈講堂の設計にあたって、当時の総長高田早苗からは、ゴシック様式であることという注文があったというが¹²⁾、北面においてあえてロマネスク的な外廊を配したのは、その静謐な情感が「静かなる日本式庭園の背景」としてふさわしいと佐藤が考えたからであろう。アーチを支える円柱がクノッソス宮殿を思わせる下すばまりの柱になっているのも「古典的な書院」との関係を意識したからかもしれない。いずれにせよ、通常考えられるように建築の一部として庭園を配するのではなく、庭園の「背景」として建築をとらえる視点は特徴的であり、都市の美観を構成する要素として建築を考えた佐藤の「建築—都市」観の一端を示していると思われる。

また、大隈講堂の建築的特質を見ると、ゴシック様式を基調としながら、その塔を左右対称を打ち破った大胆な正面構成としてまとめていること、あるいは大学校舎群の中央軸線からズラした配置によって、周囲の景観に動的に連続させていくピクチャレスクな手

図6 庭園から見た北側外廊 (撮影筆者)

法等が指摘される¹³⁾。これらの手法は、従来の大学キャンパスの構成手法としては特異であり¹⁴⁾、その効果はキャンパス側から望んだ風景に顕著である(図1参照)。さらに重要なのは、大隈講堂と通りをへだてて建っていた、やはり佐藤功一の設計による同じ昭和2年(1927)竣工の旧早稲田大学出版部事務棟(図7/以下、早大出版部と表記)との関係である。この作品はほとんど知られておらず、研究書等でも触れられたことがないものである¹⁵⁾。

2. 早大出版部の建築的特質

早大出版部が建っていた敷地は東京都新宿区戸塚町一丁目で、早稲田大学本部キャンパスの東隣にあり、正門前の大通りを隔てた向いに大隈講堂が建つ。構造及び規模は鉄筋コンクリート造3階建であるが、東端及び南端の部分は2階建としている。建物の平面は敷地の形状に沿って、南北・東西のそれぞれの軸が垂直でなく若干ふれた形となっている。北西角の部分が切り取られ、エントランスを構成している(図8)。

建物の外壁は全体が陶器質タイルで覆われ、屋根回り及び窓枠にはテラコッタが張られている。このような茶褐色のタイルと淡黄色のテラコッタの組合せは、佐藤功一の得意とした手法であり、日比谷公会堂にも用いられたものである。窓部は、窓枠と同材のテラコッタによると思われる方立てが二本立っており、それが三つ並んだ縦長窓を仕切る構成になっている。即ち、縦長窓の三連による一単位を窓枠のテラコッタが囲むことによって、結果的に横長のプロポーションが得られているのである。当時の建築意匠の潮流としては、縦長窓が主流であり、横長の窓は稀であったことを考えるならば、斬新な手法である¹⁶⁾。これらのことは、縦長窓という組積造の伝統との連続性の一方で、既存の技術からの解放を求めた佐藤功一の新機軸を語るものであり、別稿¹⁷⁾で述べたような佐藤の様式に対するアプローチに通じるものといえよう。

3. 大隈講堂と早大出版部の都市美的連関性について

ここでもっとも注目したいのは、建物各部の特質よりも、建築と都市美の関わりについてである。先に述べたように、早大出版部の平面において、南北・東西のそれぞれの軸の交わる角度は直角ではなく、敷地の形状に沿った鋭角になっている。さらに高さについては、正面(北西面)側の部分が3階建であるのに対し、東端及び南端の部分は2階建と、一層分低くされている。これらの表現は、建

図7 旧早稲田大学出版部事務棟¹⁸⁾

物正面側からのパースペクティブを強調し、(実際よりも)深い奥行感を所与している。佐藤功一は、都市美観に関する一連の言説の中でも、平坦に展開する市街地、特に道路が交差する地点等での建築の景観上の役割に注目していた¹⁹⁾。図9は「都市の美観に就て」で佐藤が用いたものである²⁰⁾。ここで彼は「街の美観と云ふものは廻り角とか十字と云ふ様な要所々々に集中されるべきものと思ひます²¹⁾」と語っているが、早大出版部の建築が建つ位置はまさに三本の道路が交差する分岐点であり、図に合致している。

また、建築が竣工した昭和2年(1927)には、隣接する大隈会館の敷地内において同じ佐藤功一の設計による大隈講堂が竣工している²²⁾。これら二つの建築を合わせ考えると、外壁に張られる同質のタイルやテラコッタ、外壁腰回りの石張り表現等の素材感の統一、また八角形の煙突等の各部にみられる造形的類同性などの点において、デザイン上の連続性が明らかに意図されている。しかしそ

図8 早大出版部一階平面図²³⁾

図9 「都市の美観に就て」におけるスケッチ

図10 昭和10年当時の早稲田キャンパス界限²⁴⁾

図11 昭和3年当時の敷地周辺図²⁵⁾

一方で、個々の建物の全体的性格をみると、大隈講堂がゴシック様式を基調とし、42.00mの全高を有しているのに対し、早大出版部は三連窓の古典的性格を微かに残しつつ、装飾を廃して近代化を図ったデザインとし、全高も11.77mと低い。「家並と街路樹」の中で佐藤功一は、「長い街路が通っている場合には、横丁の有る毎に、様式を変化させても宜しい」とし「広場とか、街路の交差点」にはむしろ「変化を必要とする」と述べている²⁶⁾。大隈講堂と早大出版部は、細部の意匠や素材感に連続性をもたせながら、積極的に様式や高さなどに変化を与えることにより、両者が醸成する美観——ゴシックの塔をもった高い大隈講堂と低層の早大出版部との対比を企図したものと考えられる。つまり、複数建築間における「都市美」を志向・実践したもののとして、前稿²⁷⁾で論じた日比谷公会堂と勸業銀行本店の事例と同一線上に捉えられるのである。それはまた同時に、大隈講堂単体で表現した＜高ー低＞の構成を、複数の建物がつくり出す風景に転移したものと捉えることもできよう（図12）。

4. 佐藤功一と「建築—都市」美

冒頭でも述べたように、佐藤功一は日本でいち早く「都市美観」の問題に着目した建築家である。彼の都市論の基調となるのは広場や交差点の形状、アイ・ストップの手法等の重視であり、この点において、レーモンド・アンウィン²⁸⁾の都市論に近似している。事実佐藤は、次のように引用しながら、形式的・規則的な都市美と不定形的・不規則的な都市美とがあることを論じている。

都市の美は庭園の美と同じく、形式的、規則的のものと、不定形的不規則的のものとに分つ事が出来る。（中略）「古の全く無意識的な従はれ

図12 小泉癸巳男「昭和大東京百図絵版画完制版 第五十六景 淀橋区・早稲田大学街」（昭和9）（江戸東京博物館蔵 95202885）
大隈講堂の右手前が早大出版部。

た傳習の下に出来上つた美的な都市の成長は、自然の成長と比較される。譬へそれ等の都市の建設者が今日迄吾々が信じて居たよりも遙かに意識して計畫したとしても、この比較に於て全く覆はれ得ない程多くの點で一致してゐる。勿論技術家は彼の豊富な記憶から引き出して、古都の美しい市街の圖面を、恰も風景畫を製作するやうに描き出すことが出来る。然し乍ら、一都市の建設は未だ斯くの如き畫面の製作を以て行はれてはならない。假令この技術家にこの仕事の有ゆる細部を指圖することが出来るとしても、現代の要求條件は彼のプロポーションの多くを覆へし、現實に彼の理想圖とは遙かに隔つたものにしてしまふ。」と英國の都市學者レーモンド・アンウィンは述べてゐる。²⁹⁾

また、アンウィンの著書『Town Planning in Practice』の図が「都市の美観に就て」に引用されていることはすでに述べたとおりである。佐藤は早稲田大学教授に就任する直前の明治42年（1909）に欧米各国をまわり、都市や建築の美しさに強い影響を受けているし、彼が著した都市論もヨーロッパの具体的な広場や建物に言及したものが多く、アンウィンの都市論が、佐藤の都市美観に大きい影響を与えたことは疑いないと思われる。

しかし、佐藤功一の特質は、そうした都市論の骨格を踏まえながら、建築個々のデザインの問題に発展させ、複数の建築で実践したことであった。「都市は全体として一つの有機的營造物である、是等を其の目的に応じて計画し且つこれを構造する技術を建築と呼ぶ」³⁰⁾と述べているように、佐藤功一にとって複数の建築を創造することは、都市の景観を有機的に造形していくことを意味したのである。

戦前の日本において建築と都市美の問題に言及した人物は、佐藤功一だけではない。藤岡洋保らによれば、都市美に関する記述は、建築・美術・都市関係の雑誌等においては、明治41年から継続して現れていた³¹⁾。たとえば美学者の黒田鵬心は、明治43年（1910）、『東京朝日新聞』に連載された「帝都の美観と建築」の中で、都市の美観を左右する最大の要素は建築であるとし、建築の美醜が周囲の建築群や都市に及ぼす効果あるいは影響によって、建築の価値が決定されるべきであることを論じている³²⁾。その意味において、黒田は佐藤の理論を先駆けていたと言える。また、建築家の片岡安は「一般に都市街路に並列すべき建築物は決して無駄な装飾を必要としない。むしろ経済的に実質本位にして堅実味を十分に発揮すればそれで足りるのであつて、それ等の建築物の集団配列が都市の美観を形成すると考へて少しも差支はない」と述べ³³⁾、都市計画大阪地方委員会の加藤善吉は「都市の建築の不統制は畢竟するに市民の不統制を意味する、将来の都市建築は大きな全体として取扱ふ必要を痛感する」と論じている³⁴⁾。彼らの言に通底するのは、複数の建築造形の総合的調和として都市美を捉える視点であったといえる。しかし佐藤功一の都市美論の特質は、次のような発言に色濃く表出されている。

図13 Raymond Unwin
『Town Planning in Practice』より

（前略）大きな建物や高い建物、赤いものや黄色なもの白いものなどが、集団をなして色とりどりに変化を見せ、しかも其の間に自ら統一があつて、是等が相接し、相連なつて美しく見えてゐる。兎角の異論はあるが、今のところ此のやうな建築の集まりに依つて美しさを見

せてあるところは、こゝより外にないといつてよからう。併しこれは主要街衢総合美ではあるが、実はこゝに言はんとするところの「街の美観」ではないのであって、街の美観といふことは、斯やうな俯瞰の美ではなく、街路に立つて見ての美観を意味するものなのである。³⁵⁾

佐藤はまた、「街路の美観といふことは上から見た美ではいけない、街路の美観は街に立つて眺められる美観といふことなのであります」（『街の美観』³⁶⁾）、「『街の美観』と言ふ事は上から眺めた美ではないのである。『街路の美観』と云うのは街に立つて眺めるを申すのである」（『街の美観論』³⁷⁾）と述べている。これらに述べられているように、佐藤にとって都市の美観は、俯瞰的な視座によって認識される総合美ではなく、街路を歩く個々の主体からの視点によって獲得される美の連景を意味するものであった。

以上のような視点に立つとき、前稿³⁸⁾で論じた日比谷公会堂と勸業銀行における形態的・色彩的対照、そして本稿で論じた大隈講堂におけるピクチャレスクな手法、早大出版部におけるパースペクティブの強調および周辺街路との動的な連続性³⁹⁾、さらに両建築のシルエットの対比がもたらすダイナミズム、交差点形状と建築造形の連関——これらの手法は、いずれも俯瞰的な視点からは捉えられない視覚的効果を企図したものであり、街路からの視線を前提とした、佐藤功一の都市美観の実践例として捉えることができる。

とくに、複数の建築に向けられた都市美の志向は重要であろう。たとえば先述の黒田鵬心は「建築群の美は、それを成す各建築の間に高さ、色、形、様式等の大体の一致を条件とする。区々の高さや色や、形や、様式では混雑を生じ、展覧会に非ずんば不可である」と述べていた⁴⁰⁾。また加藤善吉は、「『統一』は美的価値の根本であり本質的なものである、如何に一個の建築がよいとするも集团的に統一を欠き環境に調和せざるものは建築芸術への冒瀆である」と論じている⁴¹⁾。これらの言は、「統一」を一義的な前提とする点において、依然俯瞰的である。それに対し佐藤は、複数の建築間に高さ・形・様式共に差異性を与えながら、路上を歩く人々のアイ・レベルからの視覚美を得ようとしたのである⁴²⁾。そしてこのような視点は、彼の様式に対するスタンスとも連関している。佐藤功一等、明治後期に大学を卒業した建築家の様式認識が概ね折衷主義的であったことは、周知のとおりである。佐藤の場合、同様の姿勢を、都市美を獲得する手法にも反映させようとしていたことは興味深い。すなわち佐藤功一は、アンウィンの提示した都市論に立脚しながら、異なった様式の建物を併存させ、そして統合していく⁴³⁾ことにより、折衷の新たな可能性＝「建築一都市」美を追求しようとした建築家であったと捉えることができるのである⁴⁴⁾。

5. まとめ

本研究では、佐藤功一の「建築一都市」観の特質について幾つかの事例と言説を通じて検証した。そこで抽出された特質をまとめると、以下の通りである。

1. 都市の美観を俯瞰的な総合美でなく、路上を歩く歩行者からの視点による美の連景として捉えたこと
2. 様式・形態・高さなどの統一よりも、むしろ異質な形態の併存がもたらす動的な都市美に着目したこと
3. アンウィンの都市論に影響を受けつつ、自身が設計する建築によって、「建築一都市」美の可能性を実践的に探究したこと

このような「建築一都市」への志向は、それまでの明治の建築家たちによる都市認識とは位相を異にするものであった。明治期においては、専ら個々の建築の意匠に目が向けられるか、「官庁集計画」に代表されるような国家的プロジェクトとして都市全体のランド・デザインを構築し、そこに個々の建物をおいていくか、のどちらかだったからである⁴⁵⁾。銀座煉瓦街の「挫折」⁴⁶⁾に象徴されるように、明治期の建築と都市の創造においては、建築家と民衆の積極的な関連性は希薄であった。したがって、明治期の都市認識のあり方を語るとき、必然的に国家的なランド・デザインを語る⁴⁷⁾か、「市井の人々」による積極的な創造意欲を語る⁴⁸⁾かの二元的構図にならざるを得なかったのである。

それに対し、大正後期頃になると、それまでの大規模プロジェクトとしての「都市計画」から、個々の建築の総合体として都市を捉える「都市美」の探究が行われるようになる。そうしたなか、佐藤功一の都市美への視線の特質は、日本の建築家にとっての、明治期の俯瞰的（スタティック）な都市認識から、路上からの視点による、ダイナミックな都市認識への転換を象徴するものであった。今後、日本近代における都市認識の系図を問うとき、佐藤功一への言及は不可欠な作業とされよう。

【注記】

- 1) 建築家、今井兼次の分析による（『佐藤功一博士と作品』『佐藤功一博士』、彰国社、1953年、13頁）。
- 2) 伊藤三千雄「建築の大正」（『日本の建築〔明治大正昭和〕8 様式美の挽歌』、三省堂、1982年）ほか。
- 3) 都市計画学からアプローチしたものとして、赤尾光司、後藤春彦、三宅諭、米山勇「早稲田大学西早稲田キャンパスの景観形成過程に関する研究～佐藤功一の都市美論と営繕組織の活動を通して～」（『日本建築学会計画系論文集No.519』、1999年、187頁）がある。
- 4) 米山勇「東京市政調査会館及東京市公会堂の設計変更に関する考察 佐藤功一の『建築一都市』観に関する研究 1」（『日本建築学会計画系論文集No.566』、2003年）147～152頁。
- 5) 『早稲田大学政大隈総長記念大講堂競技設計図集』（海洋社、1923年）より。
- 6) 同上
- 7) 『建築雑誌』1927年12月号より。
- 8) 同上
- 9) 佐藤功一「工事報告に洩れている設計に関する思ひ出」（『早稲田学報』1927年11月号、早稲田大学校友会）76頁。
- 10) 明石信道「大隈講堂の設計談叢」（『早稲田学報』1977年10月号、早稲田大学校友会）2頁。
- 11) 北側立面は、透視図に描かれている南側立面とほぼ同意匠であった。
- 12) 中川武「早稲田大学大隈講堂 精神のリレーを促すもの」（『教育と施設』1989年25号、文教施設協会）84～85頁。ただし設計競技の時点においてそのような意向が示されていたとは考えにくい。
- 13) 前掲12)より。
- 14) 陣内秀信は「＜門＞から伸びる＜軸線＞の上に＜左右対称＞の建物を置く、という明快で象徴的な構成」が「神田錦町に登場した学習院や本郷の東大医学部をはじめ大学建築を設計する上での定石となった」と述べている（陣内秀信『東京の空間人類学』、筑摩書房、1985年、231頁）。その理由として、「明治になって新たに必要となった官庁や大学の建物を都市のなかに置くにあたって、大名屋敷から由来する『屋敷構え』を引き継ぎながら、同時に、すでになじみとなっていた社寺建築の象徴的空間の構成とも一脈通ずる＜軸線＞＜シンメトリー＞の西洋流の構成を、象徴性を要求される門から玄関にいたる表の空間に限定して導入したのではないか」と論じている（前掲『東京の空間人類学』、236頁）。
- 15) 建築関連の書では、佐藤の没後に刊行された前掲『佐藤功一博士』の「作品歴」欄に「昭和2年 早稲田大学出版部（9月） 東京都新宿区

- 戸塚町、鉄筋コンクリート造、3階建、延坪316.83坪。」の記述がある。あるいは神代雄一郎『近代建築の黎明 明治・大正を建てた人びと』（美術出版、1963年）での作品年表に建築名が記載されている。なおこの建築は平成3年（1991）8月に解体された。本稿は、解体以前に行った実測調査および諸資料に基づいて論考したものである。
- 16) 東京大学教授・藤森照信氏のご教示による。
- 17) 前掲論文、4）。
- 18) 竣工当時の写真（早稲田大学大学史編集所蔵）。なお解体前の状態は、二本の方立てがなく、横長窓であった。
- 19) 池原義郎「佐藤功一 万古不易を求めて…」『光跡 モダニズムを開花させた建築家たち』新建築社、1995年、42頁。
- 20) 佐藤功一「都市の美観に就て」『建築雑誌』1923年12月号。なおこの図について佐藤は「レーモンド、アンウィン氏の本から借用した」と記している。彼は別論文「都市美論」で「Raymond Unwin氏著 Town Planning Practice（以上、ママ）より借用」とする図版を用いており、本図もRaymond Unwin "Town Planning in Practice"からの引用と思われる。
- 21) 前掲、佐藤「都市の美観に就て」、489-491頁。
- 22) なお『早稲田大学百年史 別巻II』（早稲田大学出版部、1989年、1147頁）によれば、早大出版部について「大正十五年十月事務所もまた改築に決し、その設計を理工学部教授佐藤功一に依頼した」との記述がある。大隈講堂の起工が同年2月21であることから、設計時期は大隈講堂の方が先であったと思われる。
- 23) 早稲田大学建築史研究室蔵。
- 24) 『早稲田百年』編集委員会編『早稲田百年』（校倉書房、1979年）より。
- 25) 赤尾光司作成。
- 26) 佐藤功一「家並と街路樹」（『新しい東京と建築の話』、時事新報社、1924年）43-45頁。
- 27) 前掲論文、4）。
- 28) Raymond Unwin（1863-1940）。なお図15は、日本大学名誉教授・山口廣氏所蔵の"Town Planning in Practice"（1917年）による。
- 29) 佐藤功一「都市美論」（佐藤功一全集刊行会編『佐藤功一全集 第3巻』、日刊土木建築工業新聞社、1942年）192-193頁（初出は『中央公論』1924年1月号）。
- 30) 佐藤功一「建築の話」（前掲『佐藤功一全集 第3巻』）8頁（初出は『中央公論』1925年6月号）。
- 31) 藤岡洋保、山崎鯛介「明治末期から昭和戦前の建築・美術・都市関係雑誌に示された都市美に対する考え方について」（『日本建築学会学術講演梗概集』、日本建築学会、1990年）761-762頁。
- 32) 谷川正巳「趣味叢書にみられる都市美観について」（『日本建築学会東北支部研究報告集』、日本建築学会、1968年）。なお、黒田鵬心は明治18年の生まれであり、佐藤功一よりも7歳年少であった。
- 33) 片岡安「都市の美観」（『建築と社会』1929年7月号、日本建築協会）12-15頁。
- 34) 加藤晋吉「都市構築と新建築」（『建築と社会』1938年3月号、日本建築協会）5-8頁。
- 35) 佐藤功一「都市の構成美」（前掲『佐藤功一全集 第3巻』）215頁（初出は『政界往来』1936年2月）。
- 36) 昭和10年6月、「大東京建築祭」日比谷公会堂での講演（前掲『佐藤功一全集 第3巻』、212頁）。
- 37) 前掲『佐藤功一全集 第3巻』、222頁（初出は『都市倶楽部』1935年7月号）。
- 38) 前掲論文、4）。
- 39) 因みに、農学博士の大屋豊城も、街路の形状が都市美に与える影響を論じている（大屋豊城「都市風景の構成」『建築と社会』日本建築協会、1930年4月、281-284頁）。また内務省土木試験所の藤井真透は「都市の美は街路の美が第一だ、交通の流れが静的街路に対応して動的美をなして調和して諧律的变化を与える、街路の美は建物の美が第一だ」と述べている（「都市の総合的調和と諧律的美の創造」『建築と社会』日本建築協会、1940年5月、23-24頁）。この藤井の言説について、藤岡洋保らの前掲研究「明治末期から昭和戦前の建築・美術・都市関係雑誌に示された都市美に対する考え方について」では、「イタリア未来派に見られるような、ダイナミックな『動き』を美の要素として重視するよ
- うな視点から都市を見る」ものとして「1例しか見出せなかった」事例としている。
- 40) 黒田鵬心「浅草活動街評」（前掲『新しい東京と建築の話』）232-233頁。なお黒田は、このような条件は比較的小建築に適用されるべきものとしているが、大建築の場合においても「小建築の場合と同様、建築群としての美を成すが、高さ、色と、形と、様式的一致と云ふ事が矢張条件である」と述べている。
- 41) 前掲、加藤「都市構築と新建築」。
- 42) 但し佐藤功一は都市美における「統一」の重要性を否定してはいない。「都市美の種々相」で彼は「統一の中に変化があり、変化の中に統一があることが必要である」と述べている（『都市美の種々相』『都市問題』1937年7月号、東京市政調査会）。また「街の美観論」では「安い建築でも統一して建てられる時には、其処に統制美といふものがあるのである」と述べ、条件の悪い安価な建築群についてはむしろ統一が重要であると上で、「同一のものを建てるといふやうな場合には、適当な間隔を置いて一々締めくくりに付け、そこに変化を見せるのである」と論じている（前掲「街の美観論」、84頁）。
- 43) 鈴木博之は、「それぞれの様式のシステムを併存させ、納まりを考案し、統合して全体に至らしめる『複数原理の併存』」がエクレクティズム（様式折衷）の原理であると述べている（鈴木博之『建築の世紀末』、昌文社、1977年、284頁）。
- 44) なお陣内秀信は、明治期の東京について「建築様式の次元で折衷という表現形態をとったばかりか、洋風デザインの建築を近世の武家屋敷に由来する文脈のなかに導入し、独特の〈建築-敷地〉空間を創り、ユニークな都市空間を生み出した」（前掲、『東京の空間人類学』、231頁）と述べているように、本研究とは別の角度から「折衷」の問題を都市に向けた考察を行っており、興味深い。
- 45) 陣内秀信は、「明治の東京においては、都市の骨格、あるいは文脈はあいかわらず江戸のままにしておいて、そこに登場する個々の建物だけを洋風の目だつものにしてしている場合が多い。結局、建物が連なっている町並みや都市空間というものを考えることは当時の人々ではできなかった」と述べている（前掲、『東京の空間人類学』、11-12頁）。
- 46) 石塚裕道『日本近代都市論 東京：1863-1923』（東京大学出版会、1991年）に代表されるように、銀座煉瓦街計画については、歴史学の分野を中心に「失敗」と評されることが多いが、藤森照信は、封建都市＝江戸を超える商店街、そして文明開化の空間をもたらしたものと、積極的に評価している（藤森照信『明治の東京計画』岩波書店、1982年、42-44頁）。なお、初田亨は「銀座煉瓦街の建設は、新しい繁華街をつくり出したという点では、政府の意図が成功したといえるかも知れない」としながら、「しかし、その新しい町並も、政府の手から離れ、一度住民の手に移ってからは、当初に政府が意図したものとは、およそ異なる町並がつくられていった」と述べている（初田亨『都市の明治-路上からの建築史』筑摩書房、1981年、150頁）。
- 47) たとえば、前掲、藤森『明治の東京計画』。
- 48) たとえば、前掲、初田『都市の明治-路上からの建築史』。

〔付記〕本稿をまとめるにあたり、日本大学名誉教授・山口廣氏より重要なお教示をいただいた。ここに記し、謝意を表したい。また本稿は、『東京都江戸東京博物館研究報告』第2号（東京都歴史文化財団、1997年）に掲載された論文に新たな知見を含め加筆・修正したものであり、一部は日本建築学会関東支部研究報告会（1997年3月）で報告している。

（2003年7月25日原稿受理、2004年6月24日採用決定）